

## まえがき

本巻には神道関係の文章を集めた。巻の表題でもある『西洋人の神道観』は、二〇一二年河出書房新社の刊本が底本だが、このたび新たに第十一話として『皇后さまの祈り——『昭憲皇太后御集』をひもといて』を加えた。神道を論ずると話はおのずと神道家の自家である天皇家につながる。二〇一六年十一月七日、天皇退位有識者会議に招かれた私は、天皇のお勤めについて「神事を先にし、他事を後にす」ということを述べた。明治天皇もお歌にその旨をうたわれたからである。そして天皇は「続くことと祈ることに意味がある」旨も申し上げた（著作集版『書物の声 歴史の声』六六六頁以下参照）。明治の皇后さまのお歌にもその趣旨はうかがわれるのである。

現行の憲法に書かれていないからといって、天皇家と神道の関係にふれない法学部教授がいるとしたら、日本の歴史と文化を軽視する無教養な人なのではあるまいか。私は日本のお国柄、それが英語の *constitution* であり、それはいかえると宗教文化的伝統であるから、それを大切にしたいと思う一人で、天皇家の神道的背景に言及することを心がけた。付録一として新たに加えた『御神木が倒れた日』は昭和天皇崩御の際に『文藝春秋』の特集「大いなる昭和」に執筆した一文だが、やはりその点にふれたものである。御神木の漢字には神道の感じがおのずと伝わる。御神木が倒れた、というような国民感情を私は大事にしたい。それは偉大なる人の死に際しフランス人が「檜の樹は倒れた」と感じるのと同性質のものである。その種の感情を啜うインテリはもちろんどこの国にもいるであろうが。

付録二として『ラフカディオ・ハーンと神道』も加えた。これは伊東俊太郎教授主権の京都日文研での学

際の研究會「日本人の自然觀」での発表だが、本巻でとりあげた問題のイントロダクションとしてお読みただければ幸甚である。比較研究者としての私のアプローチの特色は、日本の宗教文化を外国との關係で再考する点にあるが、小泉八雲ことハーンを私はそのために活用した。二つの名前のあるこの人ほど内と外から日本人の心を探り説明する上で貴重な存在は少ない。その種の説き明かしをすることで、内外の読者の日本理解を進めようと私は試みた。なお『平川祐弘著作集』にはハーン關係はすでに四冊収められている。それらとの重複を避けるために、『御神木が倒れた日』と『ラフカディオ・ハーンと神道』からは、何箇所か削らせていただいた。

付録三『神道とは何か』は、牧野陽子氏とともに執筆した同名タイトルの錦正社刊行の小冊子の平川担当分である。この私の主張に関しては日文英文（内容はややずれるが相互補完的なものである）はともにすべて再録した。『西洋人の神道觀』の第三話《死者崇拜と祖先崇拜》と重なる節があるが、お許し願いたい。アランやハーンを交えて祖先崇拜の問題を天皇家との關係で再論し、日本の神道的伝統の国柄について比較文化史的視野の中で議論することは、西成彦氏が解説でもいうように、大切である。私たちは『神道とは何か』は、明治神宮關係者からの提案で執筆したが、次は靖国神社についても、力をあわせて世界大の視野の中で研究し、内外の誤解を解くために、引き続き日本語と英文で語りたいと願っている。

## 日本語版のはじめに

歴史的には日本固有の宗教であり、いまもなお多くの日本人が神棚の前で柏手かしわてを打ち、神社に参拝するという意味では信徒である神道を、西洋人はどのように把握したのでしょうか。それを記述することが本書の中心課題です。しかし著者の狙いはただそれだけに留まるものではありません。外国人の日本の宗教文化理解について客観的に語りはするが、そうすることによって、内外の読者に日本の霊的な文化を共感的に理解させようとするものです。そして世界的な視野の中で語ることによって、私たちの自己理解の資しにもしたいと願いました。そのように日本人の宗教的な感性を内と外から確かめてみようとしたのが本書です。

明治の開国以来、来日した西洋の作家や学者が、わが国の宗教文化をどのように観察したか、これら外国人の神道観の是非を論ずることで、あわせて私たち日本人の自己の内なるものを見定めたか、そのような気持もあって「西洋人の神道観」という内容を示す主題の次に「日本人のアイデンティティーを求めて」という副題を掲げました。私はそれとほぼ同じ題のフランス語著書 Sukehiko Hirakawa, *À la recherche de l'identité japonaise: le shintô interprété par les écrivains européens* (Les Éditions l'Harmattan) を二〇一二年十月にパリで出版し、それにあわせて東京の日仏会館で四回にわたってその本の内容に基づき日本語講演を行いました。選ばれた聴衆であったためか、話が調子に乗り、質問を受けるにつれて連想は連想を呼び、フランス語版がない話題や考察が次々と加わって、話は原書のおよそ五割増しの長さとなりました。その講演原稿を整理してこのたびこの日本語版を河出書房新社から世に問う次第です。

日本とはいかなる宗教社会なのか。亡うくなった家の祖先を崇拜するこの国の宗教風俗は西洋のいつの時代

のいかなる社会に近いのか。盆踊りやお地藏さまを見て西洋人はわが国人の彼岸を思う心になにを感じたのか、また日本人が神社や神棚に柏手を打ってお詣りする神道とは本当に宗教と呼べないのか、呼べるのか。幕末から明治初年に来日したヘボン、ブラウンなどの著名な宣教師やチェンバレン、サトウらの高名な西洋人日本学者は、西洋キリスト教文明の優越を過度に確信したために、神道の価値を低く見、日本が西洋文明を導入し文明開化が進むにつれ神道は消滅するであろうと予測しました。そんな彼らが正しかったのか、それともそれに異論を呈したラファディオ・ハーンやポール・クローデルなどの言い分に理があつたのか。そもそもハーンやクローデルは神道からどんな印象を受け、どんな意見を述べたのか。

日本人の多くは幼時からの習慣でお寺に参るときは両手をあわせ、神社の社頭では柏手を打ち頭を垂れます。そのときなにかを感じており、わかっているようでもありますが、しかし「神道とは何か」とあらたまつて聞かれても口に出しては必ずしも説明はできません。外地で問われるままに私がフランス語で「神道とは何か」について語ったとき、相手のフランス人に「貴方は珍しく説明をした。この前来た日本人もその前来た日本人もフランス語は達者だったが、なにも説明できず、天皇家の宗教だとしかいわなかつた」と笑われました。その人の表情には自国のことを知らぬ外国かぶれの日本人インテリに対する憫笑のような感じが感じられて、私にはひっかかるものがありました。そもそも宗教はそう簡単に口に出して説き明かすことのできるものではありません。しかしやはり説明できないのだとすると、自己の宗教文化がよくわかつておらず、日本人でありながら外国人であるのと同じような人になっているのかと疑われたりもしたのでしよう。しかしわが国には昔も今も宗教教育の授業は公立学校にはありませんから、皆が返事に窮するの無理はないのです。それに、日常生活をかえりみると、以前に比べて団地の居室にはテレビ棚こそ普及したが、神棚のある家は減りました。昔は村や町には神社が鎮座しましたが、今の団地には遊園地や公民館はあるが、鎮守の森やお宮や祠があるとはかぎりません。

神さまに対してそんなよそよそしい他人様となつてしまつたせいかどうか、外国人が神道を語るのを聞いて、日本人がはじめて自国の固有の宗教風俗についてなるほどと合点したりもするのでしょうか。またその外国人が書いたことを基に私が説明すると、日仏会館の日本人聴衆の関心がにわかには高まり、そのような外国經由で日本人が自国の神道について納得するというパラドクシカルな理解の経路には、二十一世紀初頭のこの国の精神状況がはしくも示唆されている気がします。世界化する地球社会で日本人の多くが日本の固有の宗教を見失いつつある。またそれだからこそ一旦フランス語で執筆した書物を基に日本語で講演すると、逆に日本人聴衆が自分たちの宗教文化についての自覚が生じ、それでこのような説明に頷いてくれるのだ——という印象を受けました。

そんな逆説的な日本理解の光景を目のあたりにして、これは是非とも自著も里帰りさせて出版せねばならぬと感じました。それで一気呵成に仕立てたのがこの日本語版の『西洋人の神道観——日本人のアイデンティティーを求めて』です。思いもかけぬまわり道をして成り立った本書ですが、複眼的日本理解とはこのような精神の往復運動を指すのでしょうか。外国にせよ日本にせよ、心すなおな読者を得ることができたら、嬉しいことに存じます。たとい読者諸賢全員の全面的な得心はいかずとも、納得のいく説明もあると何人かの方に部分的にもせよ首肯していただけるなら、著者としてしあわせに存じます。

グローバルゼーションが進行するこの地球社会の中で、日本は「日の本」と自称してみても、世界の霸権的な勢力の中心からはずれた田舎です。日本は人口数からいえば億の単位のメイジャーな国ではありませんが、日本語が地球上の複数の国や複数の民族の間では通用しないという点では、言語文化的な点からいえばマイナーな、少数言語の国なのです。その周辺文化のローカルな宗教でしかない神道はこれから先どうなるのか。その見通しははっきり立ちません。しかし神道の将来について私はむしろ樂觀しています。目には見えないが神道のところは日本の多くの人の半ば無意識の中に生き続けている——そう感じる節があるからです。本

書でもふれますが、初日の出に柏手を打ち、富士山に感動する気持があるならば、神道はこの国に生きて伝わりまします。この世の中で半ば無意識の中に生き続けるプリミティブな宗教感情ほど根深いものはそう多くありません。大和島根に日本語人が生きのびるかぎり続くでしょう、いや日本語以外の言葉の中にも伝わるかもしれない…… ————しかし心の問題についても理性的に明確に述べるようつとめた本書です。著者の希望的な観測や主観的な信念の披瀝はここでは慎みたいと思います。

日本には明治以来の国家の祭祀とされた神社神道に対して、過去には両部神道、吉田神道、垂加神道などが流行し、今日も黒住教、大社教、御嶽教、金光教、天理教などの名を冠する教派神道が十三派といわれませんが、存在します。そうした派の方々はもとより、全国の神社を中心とする神社神道の組織の内部の方々から見れば、西洋人の神道観や、それを解説する半西洋人のように目されがちな私ごとき者の外からの見立ては、的はずれに映ずるかもしれません。しかし内からする感じ方と外からする見方の相違については次のようにたとえることもできるといわれます。子供をお腹に宿している女性の母性としての見方は、その子の父の父性としての見方と、重なりはするが、すでに微妙に相違します。ましてや産婦人科医の外からする見立てとは感情的にはさらに異なります。しかし違いはあるにせよ、後者の診断に聴くべきことはあるのです。———信仰について語ることは難しい。私はフランス語版は日本のことをよく知らないが聡明な西洋人読者を念頭において書きました。この日本語版の一冊も専門に偏しない一般読者を念頭においてわかりやすいように書きました。このような内と外からの日本文化へのアプローチがそれなりに有効であり、多くの読者に新鮮な視野を開くことと信じます。

この日本語版ではフランス語版の構成とは順番もすっかり改めました。それでここにその新しい構成順に沿って登場する西洋人学者や作家を具体的に紹介すると———

第一話はフランスの歴史家フステル・ド・クラランジュの『古代都市』を介して展開された明治初年の民法論争についてです。明治日本はフランスの『ナポレオン法典』を全面的に取り込むとする「泰西主義」の試みに始まり、興味深い論争に突入しました。それは世界の中の日本の発展段階をどのように位置づけるかという歴史認識の問題を背景として、個人主義原理に基づくフランス民法の直訳的な法典を採用すべきか否か、というわが国の急進派と保守派の対立となり、日本の貴族院でも激越な論争となりました。その「法典論争」は「民法出デテ忠孝亡ブ」というスローガンが人心を制するに及んで、明治二十五年、家を重んじ家長に権限を与える伝統的な家族制度の維持を優先することで一応の決着を見ました。ではそのような個人本位でなく故人崇拜を基とする、日本の宗教的なお国柄は外国人作家によってどのように把握されたのでしょうか。

異国の宗教的風俗の記述やその解釈はいかにして可能かという実例を、第二話では死者の祭りの踊りを記述する一連の刺戟伝播をたどることで、説明します。明治十八年、鹿鳴館の時代にいちはやく来日し、『お菊さん』で知られ、パリの文壇では寵児となったフランス人作家にロテイ (Pierre Loti 一八五〇—一九二三) がいました。しかし日本の宗教文化に深い理解を示した西洋人はロテイではなくハーン (Lafcadio Heam 一八五〇—一九〇四) とクローデル (Paul Claudel 一八六八—一九五五) です。私たちが自分自身の感性に忠実にハーンとロテイを読み比べるなら、芥川龍之介もそうでしたが、ロテイに違和感を覚えます (私もフランス語版では日本人の霊の世界の理解につとめたハーンと日本をもっぱら異国趣味の対象として扱ったロテイの日本理解の深浅のほどを論じました。ハーンはロテイを英語世界に紹介した最初の人でもありません)。二人の関係は興味深い話題を提供してくれます。最初、異国趣味という点ではロテイにならない、その航跡を追うようにして明治二十三年に来日したハーンでしたが、なぜハーンだけが ghostly Japan、フランス語でいう le Japon spectral という日本人の「霊の世界」に入り込むことを得たのか。日本に帰化して小泉八



雲と名乗ったハーンは日本人の靈の世界を共感的に理解し、民俗学的觀察を重ね、日本人の心の變ひたを読み取り、怪談の数々を書くにいたりました。それができた理由については第四話で述べるような彼の生い立ちをはじめいろいろの説明がありますが、第七話で述べる来日以前にフランス領西インド諸島で、民俗学というところの参与さんよ觀察を身をもって行ない、黒人たちのフォークロアを調べ靈の世界に入り込むことを得たことがとくに大切だったと私は見えています。このようにして行なわれた宗教的風俗にまつわる諸家の記述の紹介が第二話（盆踊りの考察）と第四話（お地蔵様の考察）です。

祖先の靈を大事にする日本社会を説明しようとしたハーンは彼もまたフュステル・ド・クーランジュの『古代都市』から非常な刺戟を受けました。ハーンは『古代都市』を援用することで『日本——一つの解明』(Japan, an attempt at interpretation、一九〇四)を著あわしたほどです。明治の有力な民法学者穂積陳重、穂積八束やつか、岡村司つからと同じく、ハーンも日本社会に古代地中海世界と同じような家を重んずる祖先崇拜の社会を認めました。『古代都市』が日本社会の解析に関係したということの意外性には、拙著のフランス人読者たちも驚いている様子です。このようにして続けてお読みくださると、一見異なる話題に見えた古代地中海人の「死者崇拜」の話が日本人の「祖先崇拜」やそれにまつわる宗教風俗の話と無縁でないことがおわかりになるかと存じます。

神道的な自然物に靈を感じる気持は西洋にも見られないものではありません。わたしたちの神道的な目や耳の感覚でもって觀察するならば、泉や水の精や洞穴ほらあなや森や岩を生き生きとした命が通うものと感ずるアニミスティックな感覚は、古代地中海社会に存在したばかりか、ルネサンス期にも、いや現代のフランスにも底流していることがわかります。それはロンサールの詩行やアランの語録などにも認められる心情であるからで、日本人のそれとほとんど同性質の感覚といえるのではないか、ということ第三話では示唆します。

神道には祖先崇拜のほかに自然崇拜という面もあれば、火山や山岳に対する信仰もあります。第五話では



とくに富士山に畏敬いけいの念を覚えた内外の人にふれ、霊峰れいほう富士がもつ精神史的意味を探り、そこに感得される神道の感情にもふれました。日本人と接してクローデルは日光での講演でこういいました。

「人生に対するとくに日本的な態度、それは恭敬とか、尊崇とか呼べると思いますが、理知には到達しえぬ優越者をすなおに受け容ゆるれる態度であり、私たちをとりまく神秘の前で私たち一人の存在を小さくおし縮めてしまうことであり、私たちのまわりになにかが臨在りんざいしていて、それが儀礼と慎重な心づかいとを要求していると感じることなのです」

クローデルが恭敬 *reverence* とか尊崇 *respect* とか呼んだものは、クローデル自身が音楽家で親友のミオーに向けて書き送った説明によると、フランス語にはそれに相当する単語がないからそういったまでで、英語の *awe* がぴったりしているとのことでした。その畏敬の念こそが日本の神道的な宗教感情なのです。外務省研修所でフランス語を教えていた一九六五年ごろ、私はクローデルの明治神宮参拝の一節 (Meiji『明治天皇』) を読んで受講者とともに感銘を受けました。その種の印象を基に私は一九七四年に『西欧の衝撃と日本』の最終章「クローデルの天皇観」を書きました。また昭和天皇崩御の一九八九年には『御神木が倒れた日』(『オリエンタルな夢——小泉八雲と霊の世界』) 所収、本巻には付録一として収録) を書いて日本の天皇の神道的性格にふれました。

平川のフランス語版も本書も、西洋作家が日本の宗教文化をどう把握したかを語るのが第一の狙いですが、第二の狙いは読者各位に日本人自身の宗教文化的アイデンティティーを自覚させる試みでもあります。いや私自身の自分探しを語っているのだといえないこともありませぬ。かつて漢文化の影響下で日本という周辺文化の地域では自国の言語や宗教文化についてどのような自覚がいついかにして生じたか、グロバリゼーションの過程で世界全体の中ではただ一カ国にしか通用しないという意味ではマイナーで孤立しがちな日本語文化の運命はどうなるのか。ルネサンス期のフランスの詩人デュ・ベレー (Du Bellay) のいわゆる「母

語の擁護と顕彰」の問題を普遍的な「詩論とナシヨナリズム」の問題として巨視的に考察し、日本が漢文化、次いで西洋文化を受容してグローバル化しながら混濁文化の国となる過程、いいかえると日本が広義のクレオール化の過程でどのように変貌するかを過去の事例に即して考えました。それが第六話以下です。

これから先、狭くなる地球社会で、外来の大文化の影響下に日本人のアイデンティティーはどのように変わってゆくのか。

第七話ではハーンの仏領西インド諸島マルティニークでの体験と日本の出雲での体験の相似性について考察いたします。ハーンはマルティニークというクレオール語が話される社会で、西洋キリスト教文化の圧倒的な影響にもかかわらずアニミズムの感覚が残っていることを発見し、その感覚をわがものとししました。後来の大宗教は前から伝わる宗教感情をそう簡単に根拠ぎできるものではない。ハーンはマルティニークの体験に照らしてそのような予想を抱いて来日し、出雲へ行き、はたして中国渡来の仏教伝教や西洋渡来の文明開化にもかかわらず、神道が生活にしみわたっているさまを見て、自分の予測の正しさを確認しました。

その体験を通して巨視的に見えてくるものは、中心文明と周辺文明の関係、いいかえると大文明と小文明の文明の混濁ないしは混交の問題です。そしてそれは今日的にいいなおせば、グローバルゼーション globalization と表裏をなすクレオリゼーション creolization の問題へと私たちを導きます。私はこのような耳慣れない片仮名語の説明を第六話で行ない、そこでクレオール・ジャパン Creole Japan という表現までも用いますが、皆さまは第八話やとくに第九話で試みられる、そのような見方の意外性や、ハーンの先駆的考察の今日的意味に必ずや驚かれることと思います。

本書が話し言葉で書かれているのは、フランス語版を基にした講演原稿を一本にまとめたものであるためです。私は自分の講演の話し言葉に愛着のある人間です。フランスの大学が一九六八年の五月革命で大衆化

され、専門分化が一段と進行する以前に私はパリで暮らしました。それだけに当時はまだ大学世界とは別箇に存在したサロンの文化的伝統が尊重されていました。ここでは「木を見て森を見ず」というような、いきなり専門分野に特化する、不躰むづかな話し方は許されません。私はいまでもインテリジェントな男女に語りかけたい人間で、インテリクさい人と議論するつもりはありません。高度な内容を平明に語るこそ文明の作法と信じます。ただし大事な外国語の引用にかぎってそのまま原文で挿入しました（しかし引用には日本語訳を必ずつけてあります）。そうすることである知的水準を維持し、内と外からの日本観察を行なうようにつとめた様子はつきりすると思つたからです。横文字が面倒な方は飛ばして読まれても大丈夫でございます。本書の内容は当初は平川の数多い既刊の著書のさまざまな章から西洋作家の神道観に関する部分を拾い集めてフランス語にしたものでした。今回、日本語版として新たにまとめ直すことができ、まことに幸しいいたしました。フランス語版刊行や講演の後に新しく気づいたことの数々を書き加え、首尾一貫した一冊に近づけることができました。しかし以前に発表した内容もおのずと混じりますから、すでに部分的にはお読みになられた方もあろうかと存じます。その点は重なりますことをお許しく下さい。

過去にばらばらに語つたことをこのような形で一本に仕立てる過程で、私自身、脳裡のうりに意外な連想が働き、思いもかけぬ展望が次々と開けるのを感じました。日仏会館の聴衆の皆さまは私がロテイやクロードルなどをフランス作家として語る間は、私の話も従来の日本の仏文学者の月例講演と同じ次元であるとお感じになった御様子でした。それがそれらの作家を日本文化との関係で私が論じ出すに及んで、話が月並みでなくなり、議論がにわかに躍動し、新しい視界が次々に開け、聴衆の皆さまにとつても問題が他人事でなくなり、学問とは外来知識の単なる輸入紹介ではない以上、本来そのような知性・感性の運動であるべきではないでしょうか。学問の縦割りや横割りの枠を越えようとつとめたつもりです。専門家のみならず一般読者の目に新鮮な新視界を開く一冊として広く読まれることを祈っています。

ここで標題とも関係する言葉の定義の問題にふれさせていただきます。私はかつて「和魂洋才」の問題を論じた時に「大和魂」とは何か<sup>③</sup>、とその内容についての定義から話を始めませんでした。一般にどこの国でも文化的自覚は政治的自覚よりも遅れて生ずるもので、日本人の大和魂についての認識は和魂漢才に類した表現が作られた後も、必ずしも深まったわけではなかったと思います。それというのは和魂漢才というときの「和魂」の把握は他者との関係における自己認識であり、いわば外側からの規定だったからです。それと同じことが今回の書物の標題にある「神道」についてもいえます。「仏道<sup>ぶつどう</sup>」という名で仏教がはいってきたからこそ日本の固有の宗教が自覚され、それに神道という名前がつけられたのです。『日本書紀』の編述に際して、用明天皇即位前記や孝徳天皇即位前記に仏教との関係で「神道」の名前が出て来ます。ギリシヤの宣教師も日本人の信仰をシントー(Xinto)としてとらえました<sup>④</sup>。しかし神道と口にしたからといって、神道の中身がきちんと把握されていたわけではないのです。漢字や横文字の名前がつけられたからといって、それでその内実が日本人にも外国人にもはつきりしたわけではありません。日本人には外来の宗教とは違う何かが自分たちにはある、ということは直感されたが、だからといって信仰的内容が理知的な言葉でただちに分析的に把握されたというようなことはあり得なかったのです。

漢学の流入に伴い<sup>ともな</sup>、天性の日本人の智慧<sup>ちえ</sup>のことが自覚され、大和魂という表現をとりました。それである種の国文学者はその内実を固定的に定義して「大和魂とは世才とか常識的思慮判断である」ときめてかかっておられます。辞典類にもその種の定義は見られます。しかしそのような定義を前提に和魂漢才論や和魂洋才論を展開することは、大和魂の定義にまつわる註に例証したように、ミスリーディングです。日本人のアイデンティティーの内実は変化するからです。実はそれと同じことで、神道の内実も固定的に定義することは難しい。ただし漠然と大まかに捉えることはできるのです。伝説によれば西行は、

なにごとのおはしますかは知らねども忝けなさに涙こぼるる

とうたい、不可視的な存在の前で頭を垂れました。これもクローデルが第四話で指摘する「理知には到達し得ない優越者に対する畏敬の念の表明」であると私は解釈します。これが宗教的な畏敬の念のあらわれなわけではないでしょうか。そして付言するならば、『日本書紀』に神道という漢語があらわれる前からそのような気持はあつたと推定するのは自然でしょう。

旧来の学問的枠組の中で考えるなら、神道については本来は国学や宗教史関係の専門学者の皆さまにお話をうかがうのが筋でしょう。学者の皆様は一方で文献学的操作でカミやタマやモノやオニを追跡なさいます。またマツリとは何かを調査なさいます。それはそれで大切です。国文学史家や日本史家の中には微に入り細を穿つ研究をなさる方もおられます。しかし木を見て森を見ずというか肝腎の点が出ていないこともありま

す。「神道とは何か」という題の本を読んでも神道が何かさっぱりわからないこともある。しかし子供たちは仏像のある寺や十字架のある教会とちがつて鳥居をくぐって神社へ参拝すれば、ここは拍手を打つところだとわかっていきます。——そんな様だから今度は逆に「余計な学問知識は不要だ」とおっしゃる方もおられます。それに日本の神社関係の皆さまはどちらかといえば「言挙げせず」、特に言い立てることはなさいません。それやこれやで神道について平明にわかりやすくお話なさることがあまり多くはないのです。

私は自分が述べる事が正しいのか正しくないのか必ずしも確信がもてず、関係の皆さまのご批判を仰ぎたく思い、平成十七年には伊勢の皇學館大学へ出向いて講演もいたしました。それは同大学講演叢書第一一五輯『西洋人の神道観——富士山に日本人の靈性を見たハーンとクローデル』（二〇〇六年）として刊行され、比較的よく読まれてリプリントもされましたが、平川の見方がその筋の専門家の目にふれてきてどのような印象を与えたのか、その点が結局よくはわかりませんでした。それでやや不安に感じております。実は他流

試合を申し込んだというわけでもありませんが、御批判を仰ぎに私は国際基督教大学にも出向いて講演をいたしました。International Christian University では外から日本人教授が神道について話しに来たのがよほど珍しいことだったらしく「お前は勇気があるな」You are courageous などとアメリカ人教授に笑われましたが、しかしここでも具体的な御批評はうかがえませんでした。それで私、自分の神道知識について依然として正しいのか、正しくないのか定かでないわけです。

というのも私は日本の国史・国文学の学者ではない。日本の学者を西洋学者と東洋学者に分けると、覚えた西洋語の単語の語彙ごいからいえば私は断然西洋学者です。旧制中学校以来の英仏独に加えてアルプス以北や以南の土地で長く学び、ダンテ、ボツカッチョ、ロンサルル、ハーンなどを論じ訳し、英国やフランスから書物を出版し、イタリア語でも論文を書いてきました。そんな私は、日本の西洋学の旗頭の一人かもしれません。日本の人も鷗外漱石をはじめいろいろ論じましたが、そのように日本の文化史や紫式部の文学を論じるときでも、国史国文の出身者と違って世界大の視野から論じてきました。一九九一年に新設された東大教養学科の比較日本文化論分科では六カ月、心魂を傾けて講義して翌春、定年で東大を去りました。

そのような一旦は日本の外へ出た若き日の *Francisant*、フランス研究者であり西洋研究者であった私の後の年の仕事のひとつが、世界の中の日本を見直すことでした。比較研究者として精神の往復運動を繰返し、日本の宗教文化についても内からも外からも眺めつつ語ってきました。そんなところに、逆に意外な新しさがあろうかと存じます。それで私がこの種の問題に関心を抱くにいたった教養学士の遍歴、コンパラティストの閲歴えつれきを、よそで述べたことと重ならぬよう留意しつつ、冒頭に述べさせていただきます。日本に生まれた者がアイデンティティーを求めるとはいかなることか、それについてもさまざまなレベルで取り上げ、手をかえ品をかえ説明いたします。さらに巻末には私が書きました『夢幻能さくら』も添えてあります。日本人が樹きの霊、花の精になにを感じるか、を話題にしたからです。山川草木さんせんそうもくに命を認めた日本人のアニミ



ステイックでプリミティブな宗教感覚を、私は捨てがたいなかであると感じている者です。取るに足らぬ文芸作品ですが、ご参考までにお目通しください。

かつて外国で外国語で講演した内容をいまこのように日本語に置き換えると、私は頭の体操をしているようで、気持がなにか爽やかに若返るのを感じます。文化的背景を異にする聴衆には、それを考慮して、異なる語りかけをせねばなりません。そのための配慮をせねばなりません。しかしそれと同時にどこにしようとも、人間には共通する人間性があります。それだからこそ日本固有の宗教文化について語ろうとも、よく考えきちんと整理して明晰に説明するならば、日本人のみか外国人からもまた共感的理解を得られるものと信じます。と同時に、いわゆる脳内白人化した日本人からも、また頭から西洋キリスト教文明の至上を信ずる人からと同様、理解を拒否されることもあろうかとそれもまた覚悟しています。

中島精太郎宮司はじめ明治神宮国際神道文化研究所の皆さまには、かねてから平川の著書『和魂洋才の系譜——内と外からの明治日本』以下をご愛読いただき感謝にたえません。同研究所では、本書の基となるフランス語版の出版を助成し、その刊行を記念して明治神宮参集殿に、京都の国際日本文化研究センターをリードする稲賀繁美教授、皇學館大学櫻井治男教授、立命館大学ミッシェル・ワッセルマン教授など内外の気鋭の学者をデイスカサントとして招いて『西洋作家の神道観——日本人のアイデンティティーを求めて』そのものを論題にとりあげ、五百数十人の聴衆を前にシンポジウムを開催するといういかにも出版助成にふさわしい企画まで実現してくださいました。それでその際に私が行なった基調講演もこの日本語版の中に織り込ませていただきました。なお若いころの個人的な思い出もおりませて、本書のもととなったフランス語版の成立ちや内容について求められるままに率直に『西洋作家の神道観』刊行に寄せて」と題して平成二十四年十一月の『神園』誌上に発表してあります。その一部もここに再録し、日本語版の解説の一助とさせていただきます。



このような講演の機会を私に与えてくださいました各国の大学や明治神宮国際神道文化研究所、日仏会館、私の話を続けて聴いてくださいました皆さま、原稿に目を通してくれた大島真木教授、講演をこのような著書の形で世に出してくれる河出書房新社の伊藤靖氏にあらためてお礼申し上げます。

去りました御霊みたましのびて文つくる *Armistice* の白菊しろきくの花

二〇二二年十一月十一日

平川祐弘

## 西洋人の神道観

### ——日本人のアイデンティティーを求めて——

まえがき……………1  
日本語版のはじめに……………3

話の前に 教養学士の遍歴、比較研究者の閲歴……………25

——アイデンティティーを求めるとはいかなることか——

第一話 明治初年の民法論争……………39

——フュステル・ド・クラランジュ『古代都市』を介しての日本発見——

第二話 祭りの踊り……………55

——ロティの異国趣味の日本とハーンの霊の日本——

第三話 死者崇拜と祖先崇拜……………71

——アラン、フュステル・ド・クラランジュ、穂積陳重、ハーン——

第四話 ハーンとクローデルの日本の宗教発見……………94

——地蔵、地霊、杉並木、神道——

第五話 富士山……………119

——山部赤人、ハーン、明治天皇、市丸利之助、クローデル——

第六話 漢文化と日本人のアイデンティティ……………141

——白楽天の受容を通して——

第七話 樹に霊はあるのか……………158

——ハーンのマルティニーク体験と日本体験——

第八話 宗教の混淆……………187

——信仰は俗信の中にも生き続ける——

第九話 グロバリゼーションと表裏をなすクレオリゼーション……………211

——ハーンの先駆的考察の今日的意味——

第十話 神道の行方……………238

——英語化する地球社会の中で——

第十一話 皇后さまの祈り……………253

——『昭憲皇太后御集』をひもといて——

付録一 御神木が倒れた日……………259

付録二 ラフカディオ・ハーンと神道……………284

付録三 神道とは何か——小泉八雲のみた神の国、日本——……………312

WHAT IS SHINTO?—JAPAN, A COUNTRY OF GODS, AS SEEN  
BY LAFKADIO HEARN

付録四 『夢幻能さくら』……………415

註……………460

解説……………松居竜五 482

平川祐弘先生と私たちの長いおつきあい……………渡辺真美 488

ハーンを交えて議論してみたいこと……………西成彦 494

著作集『西洋人の神道観』に寄せて……………平川祐弘 501

——日本人比較研究者の神道観と『神曲』観——……………

索引……………左 1